

## O3-019

## 小児慢性疾病をもつ成人移行期の患者への就労支援プログラム及びツールに関するスコوپングレビュー

中村 沙織<sup>1</sup>、永吉 美智枝<sup>2</sup>、高橋 衣<sup>2</sup><sup>1</sup> 東京慈恵会医科大学大学院医学研究科看護学専攻博士前期課程<sup>2</sup> 東京慈恵会医科大学大学院医学研究科看護学専攻

## 【目的】

小児慢性疾病をもつ患者の成人移行支援は、医療と共に心理社会的、教育的、就業関連のニーズ全般に対する支援を指し、移行支援プログラムやツールの開発が進められている。本研究は移行支援プログラムやツールの内容をまとめ、就労支援の実施者、評価や介入の視点と支援を明らかにすることを目的とした。

## 【方法】

Prisma-ScR のガイドラインに沿いスコوپングレビューを行った。医中誌 Web 版を用いてキーワードを小児慢性疾病、成人移行期、思春期、青年期、ツール、プログラム、就労支援、成人移行期支援外来、トランジション、小児慢性特定疾病自立支援事業とし、発行年は設定せずに検索した。選定基準は原著論文、解説、総説とし、検索は 2022 年 9 月に行った。検索の結果、重複を除いた 181 文献が特定され、小児慢性疾病が対象でない 116 文献、プログラムやツールの紹介でない 46 文献、開発に関する 3 文献を除外しハンドサーチを加え 29 文献を選定した。

## 【結果】

移行支援プログラムは 8 件で、患者と保護者対象が 7 件、看護職対象が 1 件であった。患者と保護者対象の移行支援プログラムは日本の病院で作成されたものが 4 件、海外の病院のものが 2 件あり、内容は年齢に応じた疾病理解や成人期への移行準備であった。プログラムによる成果報告は 4 文献あり、患者と家族の疾患の理解が深まり、意識と行動が変化すると報告されていた。心理・社会的な自律面の変化は少なく、支援の充実が課題とされていた。移行支援に用いるツールは 22 件あり、うち 11 件は疾患別に作成されていた。患者と保護者対象のツールは 19 件で「移行準備状況の評価」「自分の情報をまとめ、説明できる」「困っていることの把握と支援の検討」などを目的としていた。

就労支援プログラムは 1 件で、小児循環器科で就労相談に応じる多職種支援が行われていた。就労支援ツールは 2 件で、対象は先天性心疾患と小児がんで、職業を選択する際の注意事項や就労上の問題を尋ねる項目があり、患者と医療者が対応策を講じるきっかけになると報告されていた。

## 【考察】

就労支援プログラム及びツールの対象疾患は限定されており、学童期から成人期までを対象に多職種による就労に関わる包括的な評価と支援が実施されていた。看護師による移行支援プログラムやツールを活用した就労支援の現状やその成果は十分に検証されておらず今後の研究の必要性が示された。

## O3-020

## 思春期にある神経性やせ症児への経口摂取につながる看護

大鐘 瞳

自治医科大学とちぎ子ども医療センター

## 【目的】

近年、神経性やせ症は低年齢化が進み、コロナ感染症拡大下で患者数も増えている。罹患期間が短くなることで回復しやすいとされており、早期治療が重要な疾患である。今回治療により体重は回復したが、経管栄養から経口摂取への移行に難渋していた神経性やせ症児の食事摂取までの過程と看護師の関わりを明らかにすることを目的とした。

## 【方法】

思春期とされる 10 代半ばの神経性やせ症で入院し、経管栄養から経口摂取へ移行してきた患児 1 例の入院中の診療記録から病状経過に沿って、実践した看護と患児・家族の反応を抽出した。記述したテキストをデータ化し、入院中の過程を 3 つの時期に分けた。そこから質的分析の手法を用いて、看護実践の大項目、小項目を抽出した。分析は小児看護専門看護師のスーパーバイズを受け、繰り返し検討し信憑性を高めた。研究者所属施設の倫理審査委員会の承認を得て実施した。開示すべき COI はない。

## 【結果】

看護実践は 3 つの時期を通して、8 つの大項目が抽出された。時期を「」、大項目は【】とする。

「治療が始まる」時期に看護師は入念な症状の観察など【神経性やせ症を抱える児への看護を始める】、【神経性やせ症を抱える児と家族との関係を始める】を行っていた。そして病勢が強くなる「治療をなんとか続ける」時期には【生命を最優先し治療を繋ぐ】、【抜け出す方法を一緒に考える】、【多職種で対策を模索する】により命を守り治療継続を必死に支えていた。その後食事摂取が始まり「経口摂取を続け退院する」時期には【児が対応できるように環境を整える】、【児の成長を認め先に送り出す】、【すぐ支えられる距離で児の戦いを見守る】を実践し、児が難渋していた経口摂取へ繋げることができた。

## 【考察】

思春期にある児と関係構築を進めながら関係を育てていくこと、構築した関係を活かし回復段階に応じた心理的距離を見極めながら関わったことにより、児自身が症状に対処できるとようになり難渋していた経口摂取に繋がったと考える。また思春期にある神経性やせ症児への看護実践の中で、児との関係性の深さや回復段階については他職種と情報を共有しながら多方面からのアセスメントをもとに関わっていく必要があると考える。